アメリカにおける Typology の変質
——Hawthorne と Melville の Symbolism の背景——

松 山 信 直

I

ホーソーンの "Egotism; or, the Bosom Serpent" という短編小説ではロデリック・エリストン (Roderick Elliston) という青年が，妻と別れて以来暗い精神状態に落ちこんでいって，胸が痛いと言い出す。実はエリストンの胸の中に蛇が入っていて，中で咬みついてエリストンをさんざん苦しめるというのである。彼が別れた妻ロゥジーナ (Rosina) への愛を取り戻すことで蛇はいなくなり，エリストンは健康と健全な精神状態に戻ったという。

語り手は「精神の病気にしろ，身体の病気にしろ，罪であれ，悲しみであれ・・・そういう病的な状態にある人は皆イゴティストになる」[1]と言い，エリストンの胸の中の蛇はこのイゴティズムのシンボルと思えた，と次のように説明している。

> The snake in his bosom seemed the symbol of a monstrous egotism, to which everything was referred, and which he pampered, night and day, with a continual and exclusive sacrifice of devil-worship. (My emphasis) (X, 274)

ところが，胸に蛇が入って苦しんでいたエリストンは，他人の弱さや過ちや悪徳を鋭く知覚するようになり，誰もが胸に蛇を入れていて，そのため胸の中で苦しめられていると考え，街で人に会う度に「あなたの蛇はあなたを咬んでいますか」(X, 275) などと問いかけて，人々に嫌がられる。野心的な政治家には，あなたの胸の中の蛇は大蛇のボアで国全体も憲法も呑みこん

でしまう，と言ったり，牧師には，あなたは聖なるブドー酒といっしょに蛇を呑みこんだ，とか，家庭のイザコザの絶えない夫婦に対しては，二人は共に青大将を胸に入れていると言ったりする。エリストンはこのように人の嫌がることを言い，人々に厄介もの扱いされる。このことにふれて語り手は次のように述べている。

> Thus, making his own actual serpent—if a serpent there actually was in his bosom—the type of each man's fatal error, or hoarded sin, or unquiet conscience, . . . we may well imagine that Roderick became the pest of the city. (My emphasis) (X, 277)

語り手は，先にふれたように，エリストンの胸の中の蛇は巨大なイゴティズムのシンボル (symbol) と思えたと言ったが，今度は，エリストンは自分自身の胸の中の蛇を各々の人の宿命的な過ちや秘ひた罪のタイプ (type) にしたと言う。ここには明らかに "symbol" と "type" の使い分けが見られる。ここで用いている "type" は，明らかに前以て予示するもの，先立つ原型の意味で使われているといえる。つまり，エリストンは，自分の胸の蛇が各自が胸に隠している宿命的な過ちや罪を前以て表している，自分の蛇が予型だ，原型だ，と考えたというのである。

このような意味のタイプ (type) という用語の使用，あるいは，用語の背後にある発想方法は，タイポロジー (typology) をふまえていると言うことができる。この点はすでにブルム (Ursula Brumm) によって指摘されているが，彼女はこの "type" をピューリタンのタイポロジーの "an expanded, literary form"[2] と考えた。ホーソーンがピューリタンの歴史書や説教集になじんでいたことは今さら言うまでもないが，ホーソーンに見られるタイポロジーとピューリタン達のタイポロジーとの関係については，ブルムと異なる理解ができるのではなかろうか。

ここで言うタイポロジーとは，類型学や形態論ではなく，予表論・予型論と呼ばれるもので，後でも言及することになるが，歴史的に先行するAが後

のBを予め示す，予言する，あるいは，後のBは先ぶれのAの実現，Aの実体・本体であるという関係にあることを示す発想方法ないしは表現を意味する。このタイポロジーは，旧約聖書のイスラエル人の世界とキリストの新約聖書の世界を繋ごうとする発想・表現として出発し，アメリカのピューリタン達もこの聖書的タイポロジーをよく用いた。だが，時代が下がるにつれて，タイポロジーはその構造や一部の用語を残しながら変化していった。19世紀前半から半ば過ぎに活躍したホーソーンやメルヴィルのみならず，彼らの同時代人であるエマソン，ソロー，ホイットマンにも，この変化したタイポロジーをうかがうことができる。[3] 19世紀までに聖書的タイポロジーは世俗化してメタフォー・シンボリズムへと変質していったといえるが，ここにその変化をたどって，ホーソーン，メルヴィルなどのシンボリズムが，大きな眼で見れば，ピューリタニズムのタイポロジーの世俗化した遺産と考えることができることを論じてみたい。

II

多くの人が指摘するように，タイポロジーの発想ならびにその表現形式はすでに新約聖書のパウロの手紙に現れている。たとえば「ローマ人への手紙」第5章14節では "〔Adam〕 is the figure of him that was to come." (My emphasis) (「このアダムは来るべき者の型である」) とあり，「コロサイ人への手紙」第2章16—17節では "Let no man therefore judge you in meat, or in drink, or in respect of an holyday, or of the new moon, or of the sabbath days: / Which are a shadow of things to come; but the body is of Christ." (My emphasis) (「だから，あなたがたは，食物と飲み物とにつき，〔あるいは祭りや新月や安息日などについて，〕だれでも批評されてはならない。／これらは，きたるべきものの影であって，その本体はキリストにある。」)[4] とある。この二つの例では "figure," "shadow" が使われているが，[5] いずれも "type" と同じ意味で，来るべきものの予型，後から

現れるものを先立って示すもの，予示するものを意味し，この予型をうけて後から現れるものを "things to come" と言い，さらに "shadow" に対して "body" と言っている。後出の例が示すように，先立つ予型の type, figure, shadow に対して，これを受けるもの，予型の対型，予示されていたものの実現（fulfilment）は，body の他に antitype, substance で表現され，予型で示す，前以て示す等の機能は typify, prefigure, forego, shadow forth 等で示された。

このタイポロジーは，上の例で明らかなように，旧約聖書の世界と新約聖書の世界ないしはキリストを繋ごうとする信仰から生まれた発想だったといえるが，4世紀頃になって，タイポロジーは新約聖書に描かれる出来事や人物，主としてキリストあるいはキリストに係わることは，すでに旧約聖書において描かれたり言及されたりした出来事や人物によって予め示されていた，予言されていた，と論じる教義，ないしは聖書釈義学の一分野として発達し，イスラエルの人々の世界とキリスト出現以降の世界とを結び付ける解釈として，中世末期からルネッサンス・宗教改革の時代に盛んに用いられるようになり，[6]特にカルヴィンについては，「カルヴィンはタイポロジーなくしてはカルヴィンたりえないだろう。彼の神学にあってはタイポロジーは中心的な意義深い役割を担っている。」[7]とさえ言われた。英米のピューリタンたちもタイポロジーをよく用い，[8]ミルトンもよく用いたことが論じられている。[9]

新約聖書に描かれる出来事や人物は前もって旧約聖書において予め示されていた，とするタイポロジーを，仮に classical biblical typology と呼ぶことにしよう。[10]ここには "character, place, event in OT vs those in NT" という構造がある。ピューリタン達はこの classical biblical typology をよく用いた。イギリスのピューリタンのウイリアム・エイムズ(William Ames, 1576–1633)はアメリカのピューリタン達に大きな影響を与えたが，彼の *The Marrow of Theology*[11] にもタイポロジーはよく用いられていた。例えば，モーゼ，ヨシュアをキリストの予型とする次のような一節がある。

> Redemption and its application were extraordinary. They were signified, first, in the deliverance from Egypt through the ministry of Moses, who was a type of Christ... and by the entrance into the land of Canaan through the ministry of Josua, another type of Christ.[12]

また，次の一節ではカナンの地を予型としている。

> Glorification was pointed to in the blessing promised in the land of Canaan, which was a type of the heavenly country.[13]

またアメリカのピューリタンの牧師サミュエル・ウイラード（Samuel Willard, 1640-1707）の選挙日の説教には，対型としてのキリストに言及した次のような例が見られる。

> God expresseth himself better pleased at the repentance of his people.... He... professeth that he rejoiceth in their returning.... Hence, 'Oh that my people had been obedient unto me, and Israel had walked in my ways!' (Psal. 81. 13). And we may truly apply that of Solomon unto Jesus Christ as the antitype: 'My son, if thine heart be wise, my heart shall rejoice, even mine' (Prov. 23. 15).[14]

そのほかアメリカのピューリタンがタイポロジーを用いた例は数多いが，カール・ケラー（Karl Keller）の指摘をここに引用しておこう。

> Thomas Shepard makes Joshua's inheritance of Canaan a type of Christ's kingdom of heaven and Isaiah's remnant a type of Christ's Church. John Davenport makes the bowing before kings and queens in Isaiah a type to the antitype of the humility of Christ's followers. Samuel Sewall makes the giving of the earth to Adam a type to the antitype of the conquest of souls by Christ. Samuel Mather makes Samson the perfect foreshadow of Christ, in looks, actions, motives, and even death. Cotton Mather, in his *Just Commemo-*

rations, makes the form of death mentioned in the Psalms "Type of our Saviour speaking in the Psalm." Edward Taylor makes "Joseph's glorious shine a Type of thee," "Joshua's [sun] but a Beam / Of thy bright Sun," and "all the shine that Samson wore is thine, / Thine in the Type."[15]

ピューリタンのリチャード・マザー (Richard Mather, 1596–1669) の息子の一人で，コトン・マザー (Cotton Mather, 1663–1728) のおじにあたるサミュエル・マザー (Samuel Mather, 1626–1671) は特にタイポロジーに興味をもち，アメリカからイギリスに帰ってタイポロジーを論じた書物 *The Figures or Types of the Old Testament* (1683) をダブリンで出版したほどだった。[16] さらに，18世紀のジョナサン・エドワーズ (Jonathan Edwards, 1703–58) もタイポロジーを盛んに用いて教義を論じた原稿を残したが，それには "The Images of Divine Things," "The Shadows of Divine Things," "The Book of Nature and Common Providence," "The Language and Lessons of Nature" といったさまざまなタイトルが考えられていた。この原稿をペリー・ミラー (Perry Miller) が1948年に出版した時，タイポロジーをふんだんに用いているこの書物にふさわしく，*Images or Shadows of Divine Things* という表題を与えた。[17]

III

今ここでホーソーンやメルヴィルとのかかわりの上で問題になるのは，旧約聖書と新約聖書をつないで論じるこの classical biblical typology ではなく，その変化した形態である。ピューリタン達はこの classical biblical typology を用いる一方で，旧約聖書に書かれている事柄を，特に自分達に起こった出来事にあてはめてみたり，自分達が行ったことを旧約聖書に描かれていることになぞらえるような発想をしばしばみせた。いわゆる American Israel[18] の発想である。それには二つの表現形式があった。一つはアナロジ

ー (analogy) である。たとえば，人々がケープ・コッドに上陸したとき，索漠とした荒野しか見えなかったことにふれてウイリアム・ブラッドフォード (William Bradford, 1590-1657) は，「彼らは，いわば，ピスガの山頂に登り，希望をかなえてくれるよりよき土地を，この荒野から眺めることもできなかった」[19] と言って，アメリカに来た移民達の前途の困難を語った。また，エドワード・ジョンソン (Edward Johnson, 1598-1672) はアメリカへ渡ってきた人たちの開拓の労苦について，彼らは「まことのヤコブのように」[20] 石を枕に眠ったと述べているし，コトン・マザーはノアの箱舟にボストンの教会の会衆をなぞらえた。[21]

これらの例には直喩 (simile) のような比喩的表現も含まれているが，全体としてみれば，自分達と旧約聖書に書かれているイスラエルの人々やその他のこととの間に平行関係を認めるアナロジー (analogy) と考えることができる。ところが，ピューリタンはその一方で，このアナロジーと同時に，タイポロジーを用いて自分達とイスラエルの人々の関係を表現した。その際，予型のタイプは旧約聖書においたが，それに対する対型 (antitype) を自分達に見出している。たとえば，トーマス・プリンス (Thomath Prince, 1687-1758) は，旧約聖書やそこに描かれている人々と自分達の関係について，

> One wou'd be ready to think the greater part of the Old Testament were written about us, or that we, tho' in a lower degree, were the particular antitypes of that primitive people. [22]

と述べている。また，インクリース・マザー (Increase Mather, 1639-1723) は1673年の説教で，植民地で争いの多いことを嘆き，マタイ伝の一節を引用して次のように述べた。

> That which Christ spake with immediate reference to the troubles preceding the destruction of the Jewith Church and State, may be

applied to the troubles of the last times, the former being a type of the latter, Matt. 24. 6, 7, 8.[23]

このインクリース・マザーの例では，聖書に述べていることが自分達にあてはまるというアナロジー(A is applied to B.)を，タイポロジー (A is a type of B.) によって確認していることが明らかにみてとれる。

聖書に述べていることと自分達をつないだこのようなタイポロジーは，旧約聖書と新約聖書を結んだ classical biblical typology に対して，liberal biblical typology と呼ぶことができるだろう。上に掲げた例が示すように，その構造は "what is described in the OT vs what happened in the colony" で示すことができる。このタイポロジーにあっては，予型は確かに聖書にあるが，それの対型はピューリタン達にかかわることで，自分達を聖書に描かれている人や出来事になぞらえながらも，アナロジーではなくタイポロジーで表現している。しかも対型は，自分達，あるいは自分達にかかわる出来事であるから，時には極めて日常的なものになる。対型が聖書にしばられていないという意味でリベラルと言える。

しかし，このように，旧約聖書と新約聖書を結んだ古典的タイポロジーがくずれ，聖書の世界とピューリタン達を結びつけた表現，つまり American Israel の表現に，アナロジーとリベラルな聖書的タイポロジーが並んで用いられたことは，次の段階の変化の引きがねになったと言えるだろう。

ピューリタンは神の意志にかなう生き方をし，神の恩寵にあずかることを確信したが，日常にあってはその神の意志を聖書によって学ぶと同時に，日常の出来事や自然現象に摂理を読みとった。例えば，疫病の流行や害虫の蔓延は，何か神の道に外れた悪が行われたために生じた神の怒りだと解され，一同がざんげし，断食して神に祈った。

このことには，前提として，疫病や害虫の蔓延という現象—自然の悪—は人間の魂の堕落・悪と関係があるという判断・理解がある。つまり，自然現象と精神の状態との間には，何らかの似通ったかかわりがあるという認識

がある。それは，たとえばコトン・マザーの "the Analogy between the Natural and Spiritual World"[24] という言葉にうかがえるように，アナロジーの関係の認識である。ところが，先にアナロジーとリベラルな聖書的タイポロジーの併用を指摘したように，自然現象と精神の状態との間のアナロジーも，同じようにタイポロジーによっても表現されている。たとえば次のような一節がある。

> [Nature was viewed as] a mappe and shaddow of the spiritual estate of the soules of men.[25]

このタイポロジーにあっては，聖書への言及はなく，かつ予型が時間的歴史的に対型に先立つ関係もくずれている。このような自然現象と精神の状態とを結ぶタイポロジーは，聖書への言及がないところから，non-biblical natural typology つまり，"natural or earthly thing vs some other thing or spiritual thing" という構造のタイポロジー，あるいは簡単に non-biblical typology と呼ぶことができるものといえよう。[26]

サミュエル・ダンフォース (Samuel Danforth, 1626–1674) に次のような表現がある。

> God in his infinite wisdom so ordered the things of the first creation that they might be natural types of what he would do in the new creation of all things by Christ.[27]

これも non-biblical natural typology であるが，このように表現される自然現象と精神の状態との関係と殆ど同じ内容が，次のような言い方でも表現されている。内容の上でほとんど同じことを言っているのに，表現方法が異なることに注目したい。

> The wisdom of God in the creation appears in his so ordering things natural, that they livelily <u>represent</u> things divine and spiritual.[28] (My emphasis)

これは18世紀のジョナサン・エドワーズの文章である。ここに見えるような，何かが何か他のことを表す，"represent" する，ということは比喩的表現であって，"they represent" は "they metaphorically stand for" とか，"they stand for" "they symbolize" などと言い換えることができる。つまり，自然現象が何らかの精神的意味を表すという考えは，アナロジー，タイポロジーだけでなく，18世紀になるとメタフォーによっても表現するようになったといえる。そしてタイポロジーの表現は比喩的表現と単純に置き換えることが可能になる。たとえば，次の文中の "types" は "metaphors" あるいは "symbols" と置き換えることができる。

> Ravens, that with delight feed on carrion, seem to be remarkable types of devils, who with delight prey upon the souls of the dead.[29] (My emphasis)

さらに，次の自然界と精神的なことをつないだタイポロジーの表現中で，"representation" と "shadow" が置き換え可能なように並列されていることにも注目したい。

> Natural things were ordered for types of spiritual things.... The type is only the representation or shadow of the thing, but the antitype is the very substance and is the true thing."[30] (My emphasis)

この二つの例もジョナサン・エドワーズからのもので，自然現象に精神的宗教的意味を汲みとろうとしたエドワーズの発想方法をよく示している。しかし，今ここで問題にしているのは，聖書に言及することもなく，予型が時間的に対型に先立つこともなく，かつ，対型がメタフォーもしくはシンボルになるようなタイポロジーである。このようなタイポロジーは non-biblical natural typology がさらに変質したもので，non-biblical, a-temporal, liberal typology，簡単にいって liberal typology と呼べるもので，タイポロジーの

用語を使ってはいるものの，意味機能の上では比喩的発想，象徴的発想と異なるところはないといってもよかろう。

IV

このように，17世紀のアメリカのピューリタンの古典的聖書的タイポロジーからタイポロジーが変質してきた様相をたどってみると，つまり，classical biblical typology から liberal biblical typology へ，さらに non-biblical natural typology へ，さらに liberal typology への変化を見てみると，タイポロジーはアナロジーと併用されることによって聖書的なものから世俗化し，かつ，結び付けられる二者の間の時間的前後関係を喪失して，メタフォーに限りなく接近してきたといえる。そして今上に見てきたように，type が metaphor, symbol と置き換え可能な liberal typology に至るタイポロジーの変化は，比喩的発想・象徴的発想への転化，象徴主義への変質となったと言えるのではなかろうか。

たとえば，次のホーソーンとメルヴィルに見られる表現は，タイポロジーの用語を使ってはいるものの，象徴的想像力の働きを示していると言える。下の三つの例の下線を施したタイポロジーの用語は，すべて symbolize と置き換えることができるからである。

（墓の上に生えている雑草への言及）

They [ugly weeds] grew out of his heart, and typify... some hideous secret that was buried with him. (*The Scarlet Letter*, X, 131)

（白さについての言及）

In many climes, whiteness typifies the majesty of justice in the ermine of the judge.... (*Moby-Dick*, VI, 189)[31]

（同上）

Is it that by its indefiniteness it shadows forth the heartless voids and immensities of the universe...? (*Moby-Dick*, VI, 195)

これらの例は，旧約的世界と新約的世界をタイポロジーによって繋いだ教義から見れば，聖書的タイポロジーの堕落とまでは言えないにしても，空洞化現象に他ならず，タイポロジーの象徴主義への世俗的変質，つまりタイポロジーが用語・構造は残しながらも，意味・機能の上で宗教と直接のかかわりを持たない象徴主義に変化していることを例証していると考えられる。言い換えれば，雑草や白さを象徴的なイメージとしたホーソーンとメルヴィルの象徴的想像力は，タイポロジーの世俗化的変質に支えられていたと言うことができるだろう。

というのは，ホーソーンとメルヴィルにあっては，タイポロジーが全面的に世俗化した liberal typology ばかりであったというのではなく，少なくとも私の言う non-biblical typology の例はいくつか見受けることができるからである。この小論の冒頭に見たホーソーンの "Egotism, or Bosom Serpent" における場合もその例の一つだが，そのほかいくつかの例が指摘できる。

ホーソーンの *The Scarlet Lettar* の終わり近くで，ヘスターの相手であったディムズデールが罪を告白するシーンがある。その一節でディムズデールは次のように言っている。

> "He bids you look again at Hester's scarlet letter! He tells you, that, with all its mysterious horror, it is but the shadow of what he bears on his own breast, and that even this, his own red stigma, is no more than the type of what has seared his inmost heart!" [My emphasis] (I, 255)

ディムズデールは自分の胸をはだけて，そこに現れているAの文字について説明している。ヘスターが胸に付けているAの文字は，自分の胸のAの文字の "shadow" であり，さらに自分の胸のAの文字は自分の胸の苦しみの "type" であるというのである。ここには non-biblical typology が二重に使われている。この二重のタイポロジーを先に引いたジョナサン・エドワーズ

の言葉，すなわち "The type is only the representation or shadow of the thing, but the antitype is the very substance and is the true thing."[32] に照らしてみるならば，ディムズデールが言っていることは，ヘスターの胸に付いているAの文字は自分の胸に現れたAの文字を予示していたが，自分の胸のAの文字の方が実質であり，さらに自分の胸のAの文字より，自分の心の苦しみの方が真実だ，ということになる。ホーソーンは予型論を十分心得たピューリタンの牧師にふさわしい発言をディムズデールにさせて，彼の心の苦しみを表現させたといえる。（ただし，17世紀のピューリタンには私の言う non-biblical typology は見られないので，その点ではディムズデールはアナクロニズムだと言わざるを得ないだろう。）

一方，メルヴィルにおいては，予型と対型の時間的前後関係をもっと明確にした予型論の表現が見られる。例えば，*Moby-Dick* の一節に次のような箇所がある。

> In the... sculptures of that immemorial pagoda, all the trades and pursuits... were prefigured ages before any of them actually came into being. No wonder then, that in some sort our noble profession of whaling should have been there shadowed forth. (My emphasis) (VI, 260–1)

これはインドの古いパゴダの壁画に捕鯨業らしいものが描かれていることに言及している箇所である。壁には，人間のあらゆる仕事と商売が，実際にこの世に現れて来た遙か以前に，前以て彫刻されていた。捕鯨業も実際に行われるはるか以前に，この壁に絵として予示され，予言されていた，というのである。

さらに，エイハブと拝火教徒のフェダラの関係も次のように，予型論の表現で示されている。

> At times... they stood far parted in the starlight; Ahab in his scuttle, the Parsee by the mainmast; but still fixedly gazing upon

each other; as if in the Parsee Ahab saw his forethrown shadow, in Ahab the Parsee his abandoned substance. (My emphasis) (VI, 537-8)

また，エイハブが後甲板に捕鯨船の乗組員全員を集め，モービー・ディックをうつ目的を明らかにする「後甲板」の章で，予言らしき兆候に注意を払わないエイハブを見て，イッシマエルが語る言葉に次のような一節がある。

Ah, ye admonitions and warnings! why stay ye not when ye come? But rather are ye predictions than warnings, ye shadows! Yet not so much predictions from without, as verifications of the foregoing things within. (My emphasis) (VI, 165)

明らかにこの "shadows" は先立つものとしての予型であり，心の中で前以て起こるもの，たとえば予感のようなものの真実性を示していると言えよう。

このような予型論をふまえた表現は，日本語にはまったくなじみがないため，翻訳者泣かせの表現であることは否定できない。けれども，これらの例は，ホーソーンとメルヴィルにあっては，ピューリタンが用いたタイポロジーが non-biblical natural typology として未だ生きていることをよく示していると言える。そして，先に述べたように，この種のタイポロジーから象徴主義に変質する liberal typology が生まれたのだった。このように，タイポロジーはアナロジーと併用されたり，世俗化的変質をみせながら，19世紀のシンボリズムの下地になってきたのだった。

19世紀のアメリカ作家達は，現象の背後には意味がひそんでいるという発想をした。たとえば，有名すぎる位有名だが，メルヴィルは "some certain significance lurks in all things, else all things are little worth." (VI, 430) と言い，エマソンはもっと直截に "Particlar natural facts are symbols of particular spiritual facts." "Nature is the symbol of spirit."[33] と言っ

た。このような表現にうかがえる象徴的想像力は，必ずしもプラトニズム的発想から生まれたのではなく，すでに上に引用したような，ピューリタン達のアナロジーやタイポロジーによって捉えられていた自然現象と精神の状態とのかかわりについての認識を受け継いでいると言える。あえてそれを繰り返すならば，ジョン・コトンの "[Nature was viewed as] a mappe and shaddow of the spiritual estate of the soules of men."[34] あるいは，コトン・マザーの "[There are] numberless lessons of Morality, which by the Help of the Analogy between the Natural and Spiritual World... we may learn from [the earthly objects]."[35] さらに，ジョナサン・エドワーズの "The wisdom of God in creation appears in his so ordering things natural, that they livelily represent things divine and spiritual."[36] などの表現にうかがえる認識は，自然を神の創造物とし，様々な現象に神の摂理を読みとろうとしたピューリタンの信仰のありかたを示しているが，それと同時に，この認識が古典的聖書的タイポロジーがくずれた変種のタイポロジーやアナロジーによっても表現され，この世俗化的変質をとげたタイポロジーの先に象徴的発想が来たことも否定できないだろう。ホーソーンもメルヴィルも共にそのような変種のタイポロジーになじみ，タイポロジーの世俗化の結果として生じたメタフォリカルな表現と象徴的発想を特色とする作家だったと言える。

注

この小論は，1991年10月27日に琉球大学で行われた日本アメリカ文学会全国大会における松山司会のシンポジアム「アメリカ文学とピューリタニズム」において，講師として発表したものに加筆訂正を施したものである。

1 Nathaniel Hawthorne, "Egotism; or, the Bosom Serpent, *Mosses from an Old Manse*, "The Centenary Edition" (Columbus, Ohio: Ohio State UP, c1974), X, 273. 以下ホーソーンの作品からの引用はこの版により，本文中に巻数，頁数を示す。

2 Ursula Brumm, *American Thought and Religious Typology* (New Bruns-

wick, N. J. : Rutgers UP, c1970), p. 116.

3 Cf. *ibid.*, 6, "Jonathan Edwards and Ralph Waldo Emerson" (pp. 86–108). および Karl Keller, "Alephs, Zahirs, and The Triumph of Ambiguity: Typology in Nineteenth-Century American Literature, " in Earl Miner ed , *Literary Uses of Typology from the Late Middle Ages to the Present* (Princeton, N. J. : Princeton UP, c1977), pp. 274–314.

4 英語は Authorized Version, 日本語は『口語聖書』(1955) によっている。

5 The Vulgate における訳語としての typos, figura, antitypos 等については, Philip Rollinson が論じている。(*Classical Theories of Allegory and Christian Culture* [Pittsburgh: Duquesne UP, 1981], p. 32.)

6 Cf. Robert Hollander, "Typology and Secular Literature. Some Medieval Problems and Examples," 及び Karlfried Froehlich, "'Always to Keep the Literal Sense in Holy Scripture Means to Kill One's Soul': The State of Biblical Hermeneutics at the Beginning of the Fifteenth Century," in Miner ed., *Literary Uses of Typology*.

7 Thomas M. Davis, "The Tradition of Puritan Typology" in Sacvan Bercovitch ed., *Typology and Early American Literature* (N. p. : U of Massachusetts P, c1972), p 38.

8 上記 Bercovitch ed., *Typology and Early American Literature* 中の諸論文, ならびに Miner ed., *Literary Uses of Typology* 中の Emory Elliott と Mason I. Lowance, Jr. の論文 ("From Father to Son: The Evolution of Typology in Puritan New England," と "Typology and Millenial Eschatology in Early New England") さらに Brumm, *American Thought and Religious Typology* に詳しい。

9 ミルトンについては Barbara Kiefer Lewalski, "Typological Symbolism and the 'Progress of the Soul' in Seventeenth-Century Literature," in Miner ed., *Literary Uses of Typology* 及び Hiroko Tsuji, *Rhetoric and Truth in Milton; A Conflict between Classical Rhetoric and Biblical Eloquence* (Kyoto: Yamaguchi Publishing House, 1991) に詳しい。

10 タイポロジーの種類に関する呼び名はまだ確立されていないように思える。Keller は私が classical biblical typology と呼ぶものに対して "orthodox" という呼称をとり, Stephen Manning が "*classic* tradition of typology" とも呼んでいることを紹介しているが (Karl Keller in Miner ed., *Literary Uses of Typology*, p. 275.), Manning はタイポロジーを exegetical, historical, pseudo-historical, allegorical, theological, natural, arbitrary, analogy of being に分類し

ている。("Scriptural Exegesis and the Literary Critic" in Bercovitch ed., *Typology and Early American Literature*, pp. 47–66.)

11 Ames のアメリカにおける影響・評価については *The Marrow of Theology*, ed. & trans. J. D. Eusden (Boston: Pilgrim Press, 1967) の Eusden の序文に詳しい。(pp. 11–12.)

12 William Ames, *ibid.*, p. 204.

13 *Loc cit.*

14 Samuel Willard, "The Only Sure Way," A. W. Plumstead ed., *The Wall and The Garden: Selected Massachusetts Election Sermons 1670–1775* (Minneapolis: U of Minnesota P, c1968), p. 94.

15 Keller, p. 276.

16 Bercovitch の *Typology and Early American Literature* の "Annotated Bibliography" では, この書物は "central formulation of the subject, for its own times and beyond" とされている。(P. 292)

17 Jonathan Edwards, *Images or Shadows of Divine Things*, ed. Perry Miller (New Haven; Yale UP, 1948).

18 Ezra Stiles, 柳生望『アメリカ・ピューリタン研究』(東京 日本基督教団出版局 1981年) 85頁。

19 S. M. Morison ed., *Of Plymouth Plantatin 1620–1647 by William Bradford* (New York: Alfred A. Knopf, 1982), p. 62.

20 Edward Johnson, *Wonder-Working Providence of Sions Savior*, Perry Miller and Thomas Johnson ed., *The Puritans*, revised ed. ("Harper Torch-books"; New York: Harper and Row, 1963), p. 154.

21 Cf. Keller, p. 280.

22 Thomas Prince, "The People of New England," Plumstead ed., *The Wall and The Garden*, p. 199.

23 Increase Mather, "The Day of Trouble is Near, Sermon II" in Roy Harvey Pearce ed., *Colonial American Writing*, 2nd ed. (New York: Holt, Rinehart & Winston, 1969), p. 183.

24 Cotton Mather, quoted in Perry Miller, *The New England Mind; The Seventeenth Century* ("1939"; Boston: Beacon Press, 1961), p. 213. この表現は次の言葉の中に見えている。"There are 'Numberless Lessons of *Morality*, which by the Help of the *Analogy* between the *Natural* and *Spiritual* World... we may learn from them [the most Earthly objects].'"

25 John Cotton, quoted in *ibid.*, p. 213.

26 Keller はこのタイポロジーを "plebeian" (p. 280) と呼んでいる。

27 Samuel Danforth, "An Exhortation to All," Plumstead ed., *The Wall and the Garden*, p. 153.

28 Jonathan Edwards, "Miscellanies," No. 119, quoted in note 4 of his *Images or Shadows of Divine Things*, p. 145.

29 Edwards, *Images or Shadows*, p. 66.

30 *Ibid.*, p. 56.

31 Herman Melville, *Moby-Dick or The Whale*, "Northwestern-Newberry Edition" (Evanston: Northwestern UP and The Newberry Library, 1988), VI, 189. 以下 Melville の作品からの引用はこの版により，本文中に巻数，頁数を示す。

32 See note 30 above.

33 R. W. Emerson, "Nature," *Nature, Addresses, and Lectures, The Collected Works of Ralph Waldo Emerson*, Vol. I (Cambridge, Mass.: The Belknap Press of Harvard UP, 1971), p. 17.

34 See note 25 above.

35 See note 24 above.

36 See note 28 above.

1992. 6. 30 受理

Synopsis

Metamorphosis of Typology in America

—The Background of Symbolism in Hawthorne and Melville—

Nobunao Matsuyama

This article is based on a paper presented to a symposium, "Puritanism and American Literature," at the Annual Convention of the Japan American Literature Society held on October 27, 1991 at Ryukyu University. It deals with a brief observation of the metamorphosis of religious typology in America into secular literary symbolism as we find in Hawthorne and Melville.

The typology as used by Paul in his letters (Rom. 5, 14, etc.) was to bridge the world of the Old Testament with that of the New Testament. It was later developed for the sake of Christian beliefs and as a method of biblical exegesis. "Without typology," it is said of Calvin, "Calvin would not be Calvin." As is expected from this, the American Puritans made frequent use of typology. Samuel Mather, one of the sons of Richard Mather and uncle of Cotton Mather, found a great interest in typology and on his return to England published *The Figures or Types of the Old Testament* in 1683; the "central formulation," an annotation of this book runs, "of the subject, for its own times and beyond."

The typology the Puritans loved to use was the "classical biblical typology," in which some person or some occurence in the Old Testament is considered a type of Christ or something to come in the world of the New Testament. However, the American Puritans often applied some events described in the Old Testament to their own experience in the colony. The Puritans' hard labors, for example, in planting the wilder-

ness were compared to Jacob's hardship mentioned in the Old Testament. They even regarded themselves as the American Israel. This analogical relation is at the same time given expression in a variant form of typology, as in Thomas Prince: "we, tho' in a lower degree, were the particular antitypes of that primitive people." This may be called a "liberal biblical typology," in which the antitype is not Christ or anything connected with him in the New Testament, but the people of the New England colony or their own experience.

When the Puritans referred to the relation between the natural world and the spiritual world, they found an analogy in it and expressed the analoguous relationship in typological terms: "[Nature was viewed as] a mappe and shaddow of the spiritual estate of the soules of men." This is another variant of typology, the type being removed from a person or event in the Old Testament. This "non-biblical, natural typology" becomes very close to a metaphor when it is used in the following way: "Ravens... seem to be remarkable types of devils." Further removed from the classical biblical typology in which the time scheme of the type and the antitype is distinctly maintained, this liberal typology is neither biblical nor temporal. It rather deals with two items as if they are in the relation of the tenor and the vehicle of a metaphor or a symbol. And this seems to me the source of New England literary symbolism.

In Hawthorne and Melvile we find occasional uses of non-biblical, temporal typology, attesting their knowledge and understanding of typology. In *The Scarlet Leller*, for example, Dimmesdale's words of confession are partially given in typological terms: "[Hester's scarlet letter] is but the shadow of what he bears on his own breast, and... even this, his own red stigma, is no more than the type of what has seared his inmost heart." In *Moby-Dick* when reference is made to the sculptures of an ancient pagoda in India, typological phraseology is used: "All the trades and pursuits... were prefigured ages before any of them actually came into being. No wonder then, that in some sort our

noble profession of whaling should have been there shadowed forth."

However, more often than these non-biblical, temporal typological expressions did both novelists use non-biblical, a-temporal, liberal typologies: such as "[ugly weeds] grew out of his heart, and typify some hideous secret that was buried with him," or "whiteness typifies the majesty of justice in the ermine of the Judge." In these liberal typologies the biblical, temporal structure of classical typology is completely discarded and typological terms can easily be replaced by the words of metaphorical or symbolic expressions such as symbolize, stand for, or imply, etc. In other words, Hawthorne and Melville's literary symbolism can be considered to have derived from the liberal typology, which is a metamorphosed version of the classical typology which their ancestral Puritans loved to use.